2026 年度

SGT　活動レポート

Global communication
Lafcadio Hearn とセツ

5 月 2 日(土)の放課後、今年度第 1 回目となる Global Communication が開催されました。今回は、焼津にゆかりのある文筆家、小泉八雲こと Lafcadio Hearn についてご講演いただきました。Lafcadio Hearn については、NHK の朝の連続テレビ小説『ばけばけ』で妻となる小泉セツとの松江での暮らしを描いたドラマで一躍有名になりましたが、Hearn が気に入っていた焼津での出来事については一切描かれていませんでした。本講座は、『静岡から世界へ、世界から静岡へ』をテーマとしていることから Hearn 研究の第一人者として焼津市にある焼津小泉八雲記念館で長く学芸員を務められ、現在は常葉大学外国語学部英米文学科准教授としてご活躍されている那須野絢子先生を講師としてお招きし、ご講演いただくことになりました。那須野先生は、焼津に生まれ、現在も焼津にお住まいの生粋の焼津っ子です。大変人気のある講座で中学生・高校生のほか、保護者の方々も聴講されました。

Hearn はアイルランド生まれでイギリス国籍を持つ父とギリシア人の母の間に生まれたイギリス人です。Hearn の父は軍医で各地を転々としていましたが、ギリシアにイギリス軍が駐屯していた時に Hearn の母となる女性と出会い結婚しました。やがて Hearn 一家は、アイルランドに戻りましたが、宗教的にも文化的にも異なるアイルランドでの生活は、Hearn の母の心を蝕み、Hearn の父は、彼女を捨てて元恋人とよりを戻し、結婚してしまいます。こうして Hearn が 2 歳の時に両親は離婚し、母はギリシアに帰国し、彼は二度と母と会うことはなかったと言われています。この出来事が父を恨み、母に対する思慕を募らせていく Hearn の精神構造を生み出しました。こうしてアイルランドは Hearn にとって忌むべき国になりました。ちなみに Hearn の First Name は、Patrick ですが、彼はこの名前を嫌い、使いませんでした。なぜなら Patrick は、カトリックのアイルランドの聖人と同じ名前だったからです。母を捨て、別の女性に走った父を嫌っていたことはこのことからも分かります。

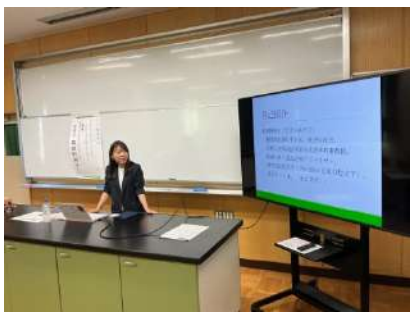
Hearn は、14 年間、日本で暮らしましたが、松江で英語の教師をやっていた時に滞在していた旅館にやってきた家政婦の小泉セツと恋に落ちました。その後、Hearn はセツの家族を連れて熊本、神戸、東京へと引っ越します。東京では、東京帝国大学や早稲田大学で英文学を教え、多くの生徒から支持されました。Hearn は、通り過ぎる外国人として日本についての滞在記を書いたらフィリピンに渡り、再び滞在記を書こうとしていたようです。しかし長男が生まれると、日本国籍を取り帰化することを決めました。Hearn はその後も子宝に恵まれ、長男を含め、3 男 1 女に恵まれました。

そんな Hearn が東京時代、夏になると避暑のため焼津にやってきました。しかも 1 度だけでなく、彼が亡くなる前の年まで子どもたちを連れて新橋駅から汽車に乗りやってきたのです。焼津の海岸は、海水浴には向いていないため、海水浴ができる場所は 1 箇所しかありません。Hearn は、16 歳の時に左目を失明しており、右目も極度の近視だったため弱視ではありましたが、その分聴覚に優れていたと言われています。焼津の海岸線が故郷のレフカダ島に似ていたのでしょう。彼は 6 度も焼津を訪れ、狭心症で亡くなる前年には焼津に別荘を買うとも考えていました。Hearn は、人から何度も裏切られたことがあったため、うそが大嫌いでした。そんな彼と気が合ったのが焼津の魚屋、山口乙吉でした。夏になると、乙吉が借りていた魚屋の 2 階を間借りし、一ヶ月以上過ごしたそうです。Hearn は竹を割ったような気っ風のいい乙吉と馬があったのでしょう。彼は焼津を愛していました。妻のセツは、最初は一緒に焼津に来たそうですが、その後は東京に戻る 3、4 日前になると焼津にやってきて家族で一緒に帰ったそうです。Hearn は、焼津から何度もセツに宛てて手紙を日本語で書いています。セツは、Hearn が信用したのは 3 人しかいなかったと『思ひ出の記』で語っています。それは松江時代の学校の教頭西田千太郎、妻セツ、そして魚屋の山口乙吉だったそうです。ここからも乙吉が Hearn からいかに気に入られていたがよく分かります。

そんな Hearn も親交のあったアメリカの女流記者 Elizabeth Bisland のことを生涯愛してとも言われています。おそらくそれは Platonic Love であったのでしょうが、彼女が Hearn のことを熱烈に愛していたかは分かりません。しかし Hearn の死後、3 度日本を訪れ、Hearn の松江の小泉八雲旧邸にも立ち寄り、Hearn の公式伝記をアメリカで出版してその売上金を Hearn の家族のために送るなど、やさしさをみせています。Elizabeth の Hearn に対する気持ちをセツがどれだけ理解していたかは分かりませんが、うそが嫌いな Hearn が Elizabeth を愛していることをセツに対して黙っていたならば、彼が一番うそつきだったということになりますね。血は争えないものです。

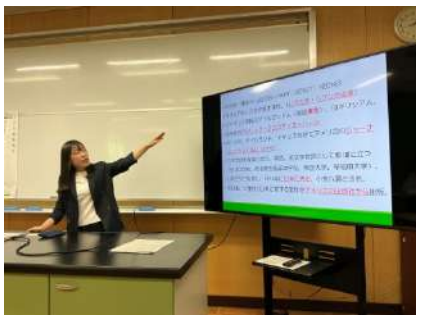
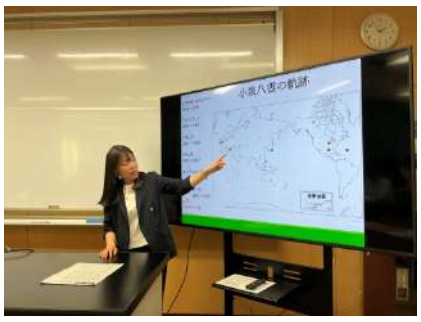
最後に Hearn の書いた『Kwaidan』ですが、これは妻セツが語る怪談を聞き取って英語で著わしたものです。この本が日本で翻訳され、人気を集めるようになると日本の作家たちも忘れ去られていた怪談を掘り起こして書物にするようになりました。温故知新とは言ったもので日本の Horror Story を人一倍掘り起こしてくれたのは、セツと Hearn ということになりますね。

次回は、この講座の続編として焼津小泉八雲記念館を訪問することを予定しています。お楽しみに。



自己紹介をされています。焼津小泉八雲記念館に学芸員として長くお勤めされていました。

晩年の Hearn の写真です。

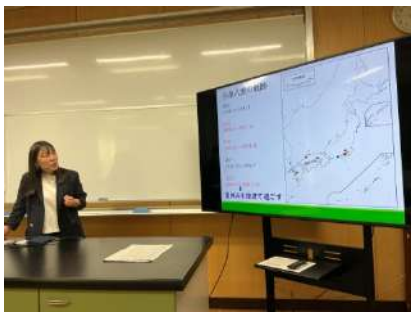



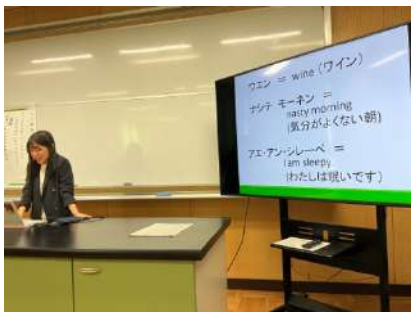
Hearn の一生です。

Hearn の軌跡です。

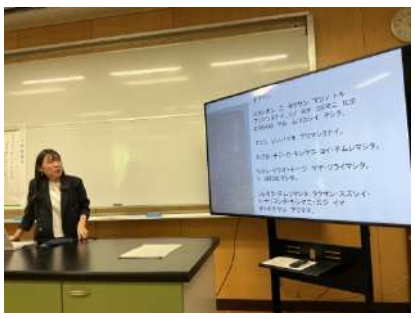
若き頃 Hearn の写真です。

高校時代の成績です。

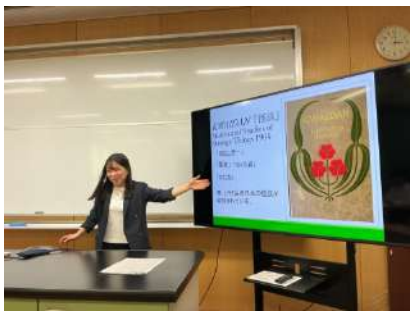
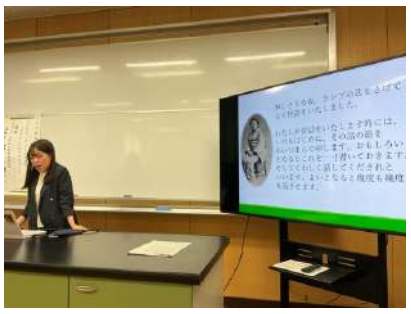




セツとの出会いと転居、二人の間で交わされた独特な会話について説明されています。ドラマ中の「ヘルンさん言葉」です。



セツは Hearn の英語をカタカナ語で書き留めて単語帳を作りましたが、英語はあまり理解できなかったようです。

Hearn はセツが日本語で語る怪談を英語に翻訳し、『Kwaidan』というタイトルを付けてアメリカで出版しました。

Hearn は、焼津を愛していました。亡くなる 1 年前には焼津に別荘を建てるつもりでした。